

死にかけた話

亀井昭

「舵」と言うヨットの本が発行されていた。その「舵」の最後のページのほうに「船売ります」「船買います」のページがあった。木造船からFRP（強化プラスチック）製の船に切り替わる転換期だったので木造船はとも安く売られていた。我々はそのような木造船を格安で買い、釣りをしたり島に渡ったりし遊んだ。

三〇年以上も前の事だから許されたが、今は許されないことだけれど、古くなって浸水が激しくなった船を、河原に引き上げて火葬にふし、酒や肴肉などを持ち込んで、船の茶毘と称して盛んに酒を飲んだ。船が不足すると、「舵」の末尾欄「船売ります」のお世話になり、船橋まで小説家の友達と見に行った。長い時間をかけてやっとたどり着いたが、指定された港の桟橋に着てみても、船はなくオーナを探してもなかなか見つからない。やっと見つけて、舟のありかを尋ねると、オーナは岸壁の海の中を指さして、

「あそこにあるべ！」と云う。

「いくら見たって、船はありませんよ」私が叫ぶと、

「ほらそこにあっぺ！」

オジサンが指さす海底にうつすらと船の影が見える。ここは浦安、山本周五郎の「青べか物語」を思い出した。我々は饒舌になるオジサンの話を聞きながら「青べか」を買わされた山本周五郎の気持ちが良く解った。

*1「青べか物語」…漁師町を舞台に庶民の姿をえがいた自伝的小説（1960）

浦安の海底にある船は買わずに、平塚の河に係留していた船を買うかどうか議論していた。ここに集まって来た人はベトナムに平和を！と唱えた「ベ平連」やその他沢山の市民運動家がいた。体力はいまいちだが皆さん口は達者だ。当時ぼろ船愛好者会員は十一名だった。みんなが勝手に主張するものだから、何時でも収拾が取れない。

「この船はみんなで乗っても大丈夫、買しましょう」

「この船は潜水艦だから止めましょう」

「これが二十万円なら、お買い得ですよ！」

「これでいいヨ！」

「これは少しエンジン起動を勉強してから、結論を出そうよ」

「ずいぶん赤錆びているよ！」

「だからこれでいいヨ！」

「でもカンパンに穴があいているし、エンジンは動くのかな」

「とりあえずお金を集めさせてもらいます。一人一万円ずつ集めさせてもらいます」

私がお金を集めて船主に云った。

「とりあえず十万円持つてきました。残りは少し待つてもらえませんか？」

船主はかぶっていた帽子を取り頭を下げていった。

「もうこれでいいヨ金なんか問題じゃないんだ」

これには我々もビックリして聞いた。

「どうしてこんなに安くしてくれたのでしょうか？」

「モグラのオジサンに聞いてみようよ」

我々船好きの仲間は、漁船やヨットなど色々乗ったけれどこの大きさ長さ十二メートルの船は初めてだった。

モグラのオジサンはいいにくそうに、

「それはな、あの船は鯖船で鯖を取り過ぎて沈みかけた船でなア！」

「だからここの者は縁起が悪いという」

「多少は眼をつむって買いましょようよう」

と云う。

「残金はあるべく早く持つてまいります」

船主は手に持った帽子を左右に振りながら、

「もう良いヨ、これで十分だよ」

と封筒の中からお金を出している。

我々は顔を見合わせて、

「しかし安いね！幽霊でも出るのかな？」

「船に住みついた幽霊がいた方が面白いじゃないか、

あまり聞かない話だけれども！」

「幽霊が住みついているのかな！」

「良いじゃないですか！魚と幽霊は仲良しで、死人を拾うと大漁になるそうじゃないですか？」

その頃は江の島や、平塚を拠点に、壊れかけて誰も欲しがらない木造の漁船や、海に沈んでいる船などを買い仲間と遊んでいた。

この船のエンジンはセルモーターが無く、手で回して掛けるものだった。

その頃の我々は若く元気で恐れるものは何もないのだった。平塚沖で燃料が無くなり、ウイスキーはあるけれど燃料の軽油が無い、私は乗っていた人全員を左舷に集めて船を少し傾けて、燃料タンクから残滓の燃料を全部出した。出した燃料は酒の瓶に入れてエンジンのピストンの上に注いでゆっくり大磯港まで行き、

給油したこともある。何があっても何とかうまく乗り切って来た。

しかしこの頃、何をやってもうまく行かないのは何故だろう、五月十五日松崎方面に車で出かけた。松崎の手前お寺の壁にぶつかり、車はひっくり返り、やっとなと脱出、身体じゆうが痛いので、傍にひっくりかえっていたら、救急車が来て体中のレントゲンを撮られた。救急車の中にあれほどの医療設備があるとは思わなかったのが驚いた。お寺の石垣の修理代として百五十万円請求された。保険で払い、今は胸をなでおろしている。救急車の医者私の住んでいる近くの病院に行き細部を見てもらうように云われて、下田までおくってもらい帰って来た。だから今は車が無く、免許証も返上した。

天城山の中腹に住んでいる私は車が無いと大変不自由だ。ここのタクシーはやたら高い、七百メートルごとにカチャツと上がる。大変不自由だが大きな事故を起こす前に、止めたのは良かった。買い物も行きは歩いてゆき、帰りはタクシーにしている。家にじっとして居ることになれないといけない。兄弟達は心配して町に部屋を借りることを勧めるが、私は自分で建て

たこの家が気に入っているのだ。厄除けのためにイヤンで買ったお守り、ブラバシ（オオワシの頭が人間の顔になっている）でも首にかけて頑張るしかない。

その事故の後、車が無いので歩く練習をしていたら、車にはねられた。幅広い道を歩いていたら横からはねられた。どこか知らない薄暗い部屋で眼を覚ました。そしてまた気を失ったようだ。次、目覚めると自宅のベッドの上だった。熱川交番に電話すると、太った警官と痩せた警官が来た。太った方が完全武装でよくしゃべる。ここに来る前に私の身上書を読んで来たらしく、社会変革運動や何やらの経歴を知っている様子で、罵詈雑言を長々と聞かされた。警察では個人情報をつかり手に入れている。全国の個人名と生年月日を入力すればどのような経歴と思想を持っているのか、すぐ解る。日本は警察国家なのだ。このままでいいのだろうか？安倍政権は戦前の治安維持法にかわる法律を造ろうとしている。完全武装した肥満型の警察官はきわどいことを長々と喋った。玄関には録音できる機械を取り付けておかなければならないのか？「ここに来る前にあなたの前歴をコンピュータで調べたけれど相当の悪だね」

私は思いがけないことだったので、

「何処が悪いですか、云って下さい」と詰め寄る。

「それは云わないことになっている！」

安保条約に反対したり、日韓条約に反対した。デモにも行った。しかし臆病な私は一回も捕まっていないので、ブラックリストに載っていないと思っていたが、この土地柄が良くなかった。私の住んでいるところから五百メートルくらいの所に、共産党の保養所がある。宮本委員長が朝散歩していたらしい。近所に住んでいる友達が挨拶すると、丁寧に返事してくれたそうだ。

その保養所の管理人が、

「赤旗を取ってくれ」

と言うので、

「配達してくれたら取るよ」

というと、

「配達は出来ない！取りに来てください」

「取りに行くの？毎日」

「私が若い頃は配達したものですよ」

そんな事を云ったら赤旗は配達しない事になり、私も少し解放された。だいたい赤旗程度の情報は新聞やテレビで日常的に流れているので、どうしても読まなけ

ればならないという必要性に欠ける。

立て続きで二回死ぬような目にあつたが、死ななかつた。

私の頑丈な身体は何ともない。ラグビーで鍛えたからか、父ちゃん母ちゃんが丈夫だったからか解らない。しかし身体に猛烈な衝撃を受けた事は間違いないので、少し静かに過ごしている。テレビの前にひっくり返って時々氷枕などを使って頭を冷やしたりしている。冷静に振り返って、はねられた後、地面にたたきつけられた時、しばらく気を失っていた。

「死ぬのかもしれない」と思ったが、そんなに悪い事のように思えなかった。

死の観念は植え付けられたもので、実際はあつけないような気がする。バタバタする暇もなく死んでしまうのだ。八十歳を目前にして大好きな相模湾を見下ろす、天城山の中腹で人知れず往生するなどは結構なことだ。

天城山には「天城心中」で知られる満州貴族の娘なども眠っている。

「天国に結ぶ恋」と言う映画を見たことがある。私もこうも立て続けに禍が降りかかって来るので、不幸のサイクルにはまった事に気が付いた。しかし何が不幸

で幸せかも解らない。不幸な時代が幸せを内蔵しているのはよくあることだ。

郵便局に行き、こまごました預金をまとめて解りやすくした。これも終活の一つなのだ。少しお金をいじったので福引をしたら一等に当たった。高級肉が入ったパッケージである。まだ食べていないので解らないが、郵便局で肉が当たるとは思いがけないことである。この日は天気も良く身体も調子が良いので歩いて郵便局まで三時間かけて行った。天城山の中腹からだらだら下るので、さほど疲れなかった。途中には野の花が咲いていたりして、それなりの目の保養になった。野生の日本桜草がドクダミの群生の中に咲いていたのは印象的だった。

一日たつて足が痛くなった。身体全体がだるい様な気分である。体重も少し減ったようだ。この頃は免許の返上は少し早かったのではなかったか？と思われるが、人身事故にでもなれば厄介なことになる。多少不便でもタクシーを使えば何とかなるのだ。眼も良くないしいつも不安が付きまとう。もう八十歳を目前にしているのだから、車の事故だけは避けたい。何にも引き際が大切だ。

認知症カフェ「ニューサマーオレンジ」に参加しませんか？と言うチラシが入って来た。その記事によると、高齢者の認知症の症状を持つ人が増えて居て、現在全国で四百六十二万人（六十五歳以上の七人に一人の割合）だそうだ。認知症カフェ「ニューサマーオレンジ」は認知症があつても暮らしやすい地域を目指し、認知症の人、家族認知症に関心のある地域の人達、医療や介護の専門家の人達が気軽に集まり、お茶やコーヒーを飲みながら語り、相談することにより、地域の支え合いを育てる居場所です。

と云う事だが、私は行かないことにしている。行けば楽しい事もあるかもしれないが、キツマリなこともきつとあるに違いない。

認知症は早かろうが遅かろうが必ず来るのだから、私のような一人暮らしの男は客観的には哀れな最期となるだろうが、それは仕方が無い事でもあるのだ。私の周辺でも友達や知人が亡くなっている。残念なことだが、お疲れ様と言いたい。死は完全なる休息なのじゃないだろうか？

おわり